

沖縄地理学会会報 ● 第 72 号

2020 年 6 月 30 日発行



編集・発行 沖縄地理学会 © 発行人 小川 護
 OKINAWA GEOGRAPHICAL SOCIETY (OGS)
 事務局 〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町字千原 1 番地
 琉球大学国際地域創造学部 廣瀬 孝研究室気付
 電話 098-895-8191 eメール info@okinawachiri.sakura.ne.jp
 ホームページ <http://www.okinawachiri.sakura.ne.jp/index.html>
 振込口座 02040-4-4697 (加入者名: 沖縄地理学会)

2020 年度 大会について (お知らせ)

2020 年度の沖縄地理学会大会は当初 8 月 1 日(土), 琉球大学にて実施を予定しておりました。しかしながら、今般の新型コロナウイルス問題の中で会員の皆様におかれましては、ご発表の準備もままならない状況に置かれているものと拝察いたしました。当学会も感染拡大防止に取り組むべき時であり、開催に向けたもろもろの準備を進められる状況にありません。

従いまして、予定していた 8 月の大会は実施を見送ることとしました。

これに伴いまして、ご発表・ポスター展示を予定されていた会員の皆様にはその機会が遅れてしまいますことを、ここに心よりお詫び申し上げます。

8 月の大会に代替される集会行事の実施時期については、未だ目途が立っておりませんが、

予定が決まり次第、学会ホームページ等でお知らせいたします。

また、総会につきましては、総会で検討すべき案件につきまして、当初の総会・大会予定日だった 8 月 1 日(土)から一週間をめどに総会資料を会員の皆様にメールで送り検討してもらう予定であります。

会員の皆様にはどうぞご理解、ご協力のほど、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

沖縄地理学会幹事会

● 学会事務局 : 〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町字千原 1 番地 琉球大学国際地域創造学部 廣瀬 孝研究室気付 (電話 : 098-895-8191 / eメール : info@okinawachiri.sakura.ne.jp)

● 2019 年度例会報告

● 去る 2020 年 2 月 10 日(月), 午後 4 時 20 分～午後 5 時 50 分, 沖縄国際大学 13 号館 1 階研究支援課会議室において、沖縄国際大学南島文化研究所南島研セミナーとの共催で、「ゆいむん」の世界観—「ゆんぬ」(与論島)からの発想—というテーマのもと、2019 年度第 1 回の例会が開催されました。講師は、1960 年代から琉球弧の研究を続けている堀信行先生(東京都立大学名誉教授)です。司会進行を崎浜 靖氏(沖縄国際大学南島文化研究所所長)が務め、20 人余の参加者がいました。

報告の内容を紹介すると、与論島の島民は自身の島を「ゆんぬ」と呼び、島の東部のイノー(礁湖)内の洲島を「ゆりがはま」と呼んだが、地名は「百合ガ浜」と書かれた。これらの呼称は、海の彼方からの「ゆいむん」または「ゆりむん」、すなわち「寄り物」に由来するとした。

「彼方から霊力を帯びた「モノ」が寄ってくる」ことに思いを馳せる精神性は、水平方向を基

軸とする異界につながる自然への憧憬であり、畏怖であり、またその世界と交流し、循環する心でもある。こうした霊力の循環思想の捉え方は、与論島に限らず、奄美・沖縄地域で一般的に見いだせるとした。

堀先生の報告は、琉球・沖縄の基層文化に見られる地域住民の精神性に思いを馳せ、サンゴ礁を中心とする自然環境との関わりから深く洞察している点に、参加者の関心を集めた。

本例会には、会員以外に、文化人類学、民俗学、言語学の研究者も参加し、学際的な研究会となった。参加者からの感想を一部紹介すると、「水の循環と地の循環の話は、とても興味深かった」、「女性とユイムンの関係を、水、石、つば、火と関係づけながら、与論島の風習と重ねて論じられたのは、新たな視点として参考になった」など、「自然と人間」の関わりを重視した地理学の重要性を再認識した例会となった。

(文責：崎浜 靖)



左の写真は報告を行った堀氏。右の写真は発表会場の様子(沖縄国際大学南島文化研究所提供)。

特別寄稿

会誌・「沖縄地理」の発行形態が変わります

沖縄地理編集長 宮内久光

2019 年度沖縄地理学会総会で、「沖縄地理」の発行形態を次号(第20号・2020年6月発行予定)から次のように変更することが決まりましたので、ご報告します。

変更点

- ①「沖縄地理」を J-Stage (国立研究開発法人 科学技術振興機構)に移行して、電子ジャーナル化します。それに伴い、冊子体での発行は行いません。
- ②会員の皆さまには、全ページが印刷されたプリント版(2穴パンチ済み)と CD-ROM 版をそれぞれ配布します。論文はプリント版で直

接読んでいただくことも、CD-ROM 版からパソコン上で読んでいただくことも可能です。

③CD-ROM 版はケース入り(表紙付)なので、そのまま本棚や CD ラックなどで保管ができます。また、ご自分で「沖縄地理」用の専用バインダーを用意していただき、プリント版を毎号綴じていけば、これまでどおり紙ベースでも「沖縄地理」が保管できます。

電子ジャーナル化するメリット

- ①現在、多くの一流学術雑誌が J-Stage 上で発行されています。「沖縄地理」も J-Stage で発行することにより、雑誌の価値が高まりま

す。各論文にはインターネット上のドキュメントに恒久的に与えられる識別子 (DOI) も付けられます。「沖縄地理」に掲載された論文はこれまで以上に全世界で閲覧されるようになります。

- ②近年, GIS 関係の論文を中心に, 図表のカラー掲載希望が多くなっています。冊子体は白黒印刷が基本で, カラーページには追加料金が必要でしたが, 電子ジャーナルの場合は, 全ページカラーでも無料掲載が可能となります。カラー化することで, 図表の表現力が上がります。
- ③J-Stage への掲載は無料なので, 印刷・製本費が不要になります。会員の皆様に配布するプリント版の印刷や CD-ROM 版の作成は編集委員会で行いますので, 経費は大きく削減できます。貴重な学会費は, 例会での外部講師

への謝金やシンポジウム開催費など, 学会を充実させる各種活動により多く使えるようになります。

電子ジャーナル化しても変わらないこと

- ①今回の変更は, 発行形態の変更のみです。投稿規定や査読方法, 編集方針などは従来通りで変わりません。
- ②原稿はこれまで同様, 手書き原稿での提出も可能です。
- ③「沖縄地理」第 19 号から, 執筆者には版下 PDF ファイルをお渡しして, 抜刷が必要な場合は各自で作成することになっています。

なお, 次号, 沖縄地理 20 号の発行は, 新型コロナウイルス等による編集作業の遅れから, 8 月下旬ごろを予定しています。

報告 「沖縄地理」掲載論文のダウンロード数

沖縄地理編集長 宮内久光

「沖縄地理」は第 1 号から論文が PDF 化され, 2015 年 7 月から沖縄地域学リポジトリにて公開されています。これにより, CiNii や国立国会サーチなどで検索すると, 誰でも世界中どこからでも論文 PDF ファイルをダウンロード (DL) できるようになりました。現在, 沖縄地理 19 号の論文までちょうど 140 論文が搭載されています。

2020 年 3 月末までの約 5 年間に論文がダウンロードされた回数を集計してみました。すると, 沖縄地理の論文はなんと, のべ 24,811 回もダウンロードされていました。これは 1 年間にすると約 5,000 回, 1 日当たり平均 13.6 回となります。つまり, 沖縄地理の論文は 2 時間に 1 本の割合で読まれていることになります。考えてみると, すごいことですね。

5 年間で DL 数上位 10 論文を表 1 にまとめました。最もダウンロードされた論文は, 沖縄地

理 14 号に掲載された「1948 年米軍作成 1/4800 地形図を用いた DEM 作成と国土地理院 5m メッシュ標高との差分による地形改変判読」(渡邊康志・辻 浩平・上原富二男) の 1,161 回でした。GIS に関する最先端の論文だけに, 地理学以外の研究者たちからも読まれているものと思います。DL 数が 1,000 回を超えているのはこの論文だけです。第 2 位は「映画で学ぶ地理的景観試論 : 映画の効果的利用」(矢野司郎・12 号), 第 3 位は「沖縄県における特産品の販路開拓に関する一考察 : モズクのフードシステムに着目して」(砂田智裕・16 号) で, 第 4 位の小川論文も含めて DL 数は 700 回台です。

上位 10 論文をみて気が付くことは, 自然地理学の論文が入っていないことと, 学生の卒論が基になっている論文が半分を占めていることです。論文をダウンロードしている人は, 研究者だけではなく, 卒論の先例研究を探してい

る学生、報道関係者をはじめとした専門職、そして一般市民まで幅広いと思われます。そのため、ダウンロードされやすい論文の傾向として、社会的に関心をもたれている事象をテーマに

表1 全期間論文ダウンロード数上位10本(2015年7月1日～2020年3月31日)

	執筆者名	論文タイトル	掲載	DL数
1	渡邊康志・辻 浩平・上原富二男	1948年米軍作成1/4800地形図を用いたDEM作成と国土地理院5mメッシュ標高との差分による地形改変判読	No.14 p.1-18	1161
2	矢野司郎	映画で学ぶ地理的景観試論：映画の効果的利用	No.12 p.1-16	748
3	砂田智裕	沖縄県における特産品の販路開拓に関する一考察：モズクのフードシステムに着目して	No.16 p.27-40	707
4	小川 護	那覇市における一般廃棄物の処理と課題	No.13 p.35-48	706
5	奥浜 玲・尾方隆幸	那覇新都心・北谷・読谷地区における米軍返還跡地の土地利用	No.14 p.39-46	672
6	堀本雅章	架橋に対する島民意識：急激に観光地化した鳩間島の事例	No.14 p.39-46	594
7	宮内久光・大城美樹	沖縄県離島におけるコンビニエンスストアの立地展開とチェーン間競合	No.18 p.17-34	584
8	宮城彰仁	沖縄県におけるプロ野球キャンプ開催の地域的要因	No.7 p.111-124	554
9	小川 護・嘉納 愛	那覇新都心地区における街づくりとその魅力について：緑視率調査・イメージ調査などからの分析	No.9 p.41-50	526
10	堀本雅章	竹富町鳩間島における島民意識と観光の特色	No.13 p.49-60	507

表2 2019年度論文ダウンロード数上位10本(2019年4月1日～2020年3月31日)

	執筆者名	論文タイトル	掲載	DL数
1	宮城彰仁	沖縄県におけるプロ野球キャンプ開催の地域的要因	No.7 p.111-124	433
2	宮内久光・大城美樹	沖縄県離島におけるコンビニエンスストアの立地展開とチェーン間競合	No.18 p.17-34	378
3	渡邊康志・辻 浩平・上原富二男	1948年米軍作成1/4800地形図を用いたDEM作成と国土地理院5mメッシュ標高との差分による地形改変判読	No.14 p.1-18	344
4	矢野司郎	映画で学ぶ地理的景観試論：映画の効果的利用	No.12 p.1-16	297
5	卯田卓矢	高齢者における観光ボランティアガイド活動の特徴と継続要因：今帰仁グスクを学ぶ会を事例に	No.18 p.1-16	282
6	池田未来・尾方隆幸	観光利用による鍾乳洞の大気環境変化：沖縄島「玉泉洞」における移動観測	No.11 p.33-41	258
7	奥浜 玲・尾方隆幸	那覇新都心・北谷・読谷地区における米軍返還跡地の土地利用	No.14 p.39-46	251
8	小川護・喜屋武徹大	豊見城市におけるマンゴー生産とその認識度	No.18 p.57-66	221
9	砂田智裕	沖縄県における特産品の販路開拓に関する一考察：モズクのフードシステムに着目して	No.16 p.27-40	202
10	小川 護	那覇市における一般廃棄物の処理と課題	No.13 p.35-48	192

したものが考えられます。学生が卒論で研究テーマに選ぶのは、身近な地域で自分が関心を持った事象なので、それが論文文化されて掲載された場合、DL されやすいのではないかと思います。また、自然地理学の数式が入ったアカデミックな論文は、一般市民の方にはとっつきにくいのではないかと思います。ちなみに、自然地理の論文で最も DL 数が多いのは、沖縄地理 11 号に掲載された「観光利用による鍾乳洞の大気環境変化：沖縄島「玉泉洞」における移動観測」（池田未来・尾方隆幸）の 20 位、387 回でした。

表 2 の年間ランキングをみると、第 1 位は宮城彰仁「沖縄県におけるプロ野球キャンプ開催の地域的要因」（沖縄地理 7 号）の 433 回です。昨年 1 年間だけに限ると、毎日 1 回以上はダウンロードされていたことになります。表 1 をみると、全期間でも 554 回で 8 位に入っています。ということは、この論文は公開されて 4 年間のトータルで 100 回程度の DL 数だったものが、昨年度は急に DL 数が 400 回以上に増えたということになります。その理由を探るべく、この論文の月別 DL 数を確認してみました。私は、コロナ騒動に関連して、2 月、3 月にプロ野球キャンプへの関心が高まり、DL 数が多かったのではないかと推測していたのですが、2 月は 7 回、3 月は 1 回のみで、仮説はあっさりと却下されました。最も DL 数が多い月は 10 月の 115 回、次いで 5 月の 82 回、6 月の 63 回と続きます。これらの月の DL 数が多いのはなぜなのでしょう。見当もつきません。結局、この論文がなぜ昨年度に急に DL 数が増えたのか、原因がわかりませんでした。

ただ、一つ言えることは、リポジトリに論文が登録されていると、論文発表からしばらく時間が経った後でも、そのテーマに関心を持った人が DL して論文を読んでもくれる、将来の誰かに役に立つ可能性がある、ということです。著者の宮城さんも、まさか 15 年も前に卒論をまとめた論文が、今になって突然、多くの人に読

まれているということは、論文を投稿した時には思いもよらなかったのではないかと思います。

3 位の渡邊ほか論文、4 位の矢野論文、7 位の奥浜・尾方論文、9 位の砂川論文、10 位の小川論文は、第 1 表での DL 数と比較すると、リポジトリ公開以来コンスタントにダウンロードされて読まれていることがわかります。

リポジトリに登録されていると、世界中の人が論文を読んでもくれると言われますが、本当でしょうか。実は、沖縄地理全体だけですが、国別 DL 集計もできます。日本以外で最も DL 数が多かったのはアメリカからの 2,921 回でした。第 2 位はオーストラリア（701 回）、第 3 位はイギリス（353 回）と英語圏が続きます。7 位のカナダ（144 回）、8 位のニュージーランド（86 回）も含めると、上位 10 位中 5 か国までが英語圏です。沖縄地理は英語のタイトルでも検索できるので、英語圏の人がダウンロードしやすいのでしょうね。もっとも、日本語の論文が本当に読まれているのかは不明です。

英語圏以外では、4 位のドイツ（201 回）が最高で、5 位韓国（201 回）、6 位中国（181 回）、9 位台湾（36 回）と東アジアの国・地域が入っています。ここまでは想定内だと思いますが、10 位はスイスで私には意外でした。このほか、14 か国から論文がダウンロードされています。中にはブルガリアやウルグアイ、ニューカレドニアからもダウンロードされているのには驚きました。私の憶測ですが、外国からダウンロードされているのは、自然地理学系の論文が多いのではないかと考えています。

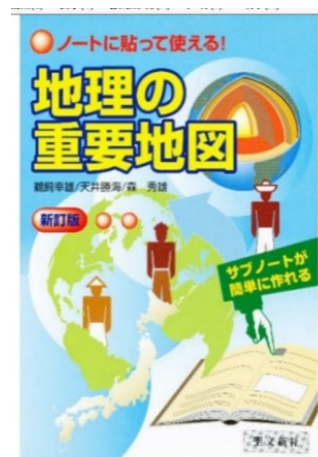
沖縄地理 20 号からは J-STAGE に移行しますが、これにより、沖縄地理の論文は Google Scholar などでも検索からヒットするようになります。そうすると、更に世界中から論文が読まれるようになるでしょう。編集委員会でも国際化に対応した誌面づくりを考えていきたいと思っています。

鵜飼先生の思い出 —地理教育・地図教育・視聴覚教育を通じて—

小川 護（沖縄国際大学）

郁郁乎トシテ文ナル哉（いくいくことしてぶんなるかな）。孔子の論語の一節である。ちなみに郁郁とは、文明・文化が盛んで香気があるさまをあらわし、孔子自らが理想とした古代周王朝の本質を称えたものである。この一節が高校名の由来となる高校が東京都文京区向丘にある。郁文館学園（郁文館中学校・高校）である。本校は1889（明治22）年に設立された。また、当校は夏目漱石の代表作の一つである『吾輩は猫である』に落雲館中学の名称で登場する。郁文館中学の隣の敷地（現在日本医科大学）には、夏目漱石が一時期居住した借家があり（通称猫の家といわれ現在は犬山市の明治村に移築）に由来するといわれている。また、旧郁文館中学の時代には、国文学者の物集高量（もずめたかかず）や民俗学者柳田国男が学んだことも知られている。筆者は現在の勤務先着任前には縁あって当校でお世話になった。また、郁文館高校には、地図教育、地理教育、視聴覚教育において一時代を築いた鵜飼幸雄先生が在職され、私自身地理教育や地図教育の面でいろいろご指導いただいた。今日、地理の一教員として奉職できるのも鵜飼先生のおかげだと感謝している。

鵜飼先生は1927（昭和2）年東京日本橋区（現在の中央区日本橋浜町付近）でお生まれになった。その後、区立日本橋商業高校（現都立京橋商業高校）を経て東大農学部養成所に進学された。1946（昭和21）年に新制高校卒業資格を得て、日本地図株式会社（2000年にゼンリンに吸収合併される）編集部就職された。当時日本地図（株）には、東大理学部北田宏蔵教授（当時、地図投影法の権威）、学習院大学の村松茂樹教授（人文地理学）の両先生研究室があり、多く薫陶を受けられた。その後鵜飼先生は、地理・地図を体系的に学ぶ必要性を強く感じられ、日本



左が故鵜飼幸雄先生
右 鵜飼先生著の代表的参考書
「地理の重要地図」聖文社（1999年）
※現在は絶版

の私学の中で最古にして最大の規模を誇る立正大学文学部地理学科に進学された。当時、当大学地理学科には夜間部が設置されており、地理学を志す勤労学生にとっては恵まれた環境であつたといえるだろう。また、地理学科には東京文理大学名誉教授であつた田中啓爾先生も地理学教室の主任教授としておられ、田中先生を慕って全国から地理を学ぶ学生が集まったと今日でも語り草になっている。とくに、田中先生は地図帳の学校教育への普及、地誌学の体系化に尽力され、当然鵜飼先生も田中先生から大きな影響を受けたことをよく私に話してくれた。立正大学在学中に地理学を修めると同時に社会科教員免許も取得された。さらに、日本地図（株）勤務時代には、『戦災消失表示帝国近傍図』（1945年）のための調査に当たられた。それらの仕事が一段落ついたのち、地理の教科書や地図帳の編集・出版を担当された。だが、販売ははかばかしくなく、実際に地理の教科書を使い、子供たちに直接指導することを強く感

じ、教育界に転身された。

鵜飼先生は江戸川区立瑞江中学校を皮切りに都立第五商業高校、桜陰中学校へて郁文館中学校・高校に奉職された。その間に先生は、東京私立中学・高校地理教育研究会の会長、名誉会長、全国地理教育研究会名誉会員、日本地理学会、人文地理学会など多数の役職につき活躍された。また、日本国際地図学会(現日本地図学会)では常任委員、評議員、地図教育専門部会、こどもと地図教育専門部会の主査などを長年にわたって務められた。

鵜飼先生の地理教育に関するお考えは、①地誌教育の重視、②地図の活用、③視聴覚教育の重視にまとめられるだろう。①の地誌教育では田中先生の影響が多分にあるのだろう。とくに私によく話しておられたのは、最近の地理学、地理教育は系統地理の分野に偏りつつあり、地誌が軽んずる傾向にある。今日の世の中において専門分野が突出して重視される中で総合科学は全体を俯瞰する意味でも大変重要であること、そして、その任に適しているのは地理＝地誌であることを強調されておられた。とりわけ鵜飼先生の地理教育のスタンスは子供たちに地域の諸問題とその解決のためには、総合科学としての地誌の視点をいかし、疑問をもたせ、考えて問題解決の筋道を生かす地理教育であり、今日のeラーニングの走りであったといえる。なかでも記憶しているのは、私が勤務していた当時、郁文館高校では、地誌に力点を置いた帝国書院の『高等学校 世界地理B』を使い「考えさせる地理教育」を实践されたことが印象に残っている。

②の地図の活用では、鵜飼先生は「地理は地図に始まり地図に終わる」ということを日ごろからいわれていた。なかでも、後年、日本国際地図学会のこどもと地図教育専門部会主査を担当されていた当時、子どもたちの空間認識能力が低下していたことを心配されておられた。子どもたちはイラストの地図などには関心を持つが、実社会の街路図を苦手とする場合が多

い。中でも学校の送り向かいを親が車で送迎するように、子どもたちの歩行体験が不足していることをあげておられた。自分がある周辺を皮膚感覚で感じ取り、空間認識ができないと当然のことながら地図を読むことはできないのである。

そういった中での地図教育は、小学校低学年では、地図を読むための基礎的能力「あっち、こっち、遠い、近いなど」といった感覚、自分の家や学校、公園などの場所を認識する力の育成が重要であるとした。中学年では、方位、距離感覚、身近な地域の地形や土地利用などの特色、さらに土地利用の特性などについて地図を通じて全体像をとらえる。それらの発展形として、子どもたちの行動範囲や興味の広がりとともに、地図とともに身近な地域から市町村、都道府県、日本全体さらに世界へと広がる。このような中で地図を生かすことの重要性を常日頃から鵜飼先生は力説されておられた。

③の視聴覚教育で私が印象に残っているのは、昭和40年代全国の学校で視聴覚教育の重要性が叫ばれながら本格的施設がなかった中で、鵜飼先生が中心になって、日本の中学・高校では全国最初となる本格的AVホールを設計等手掛けられたことである。鵜飼先生の「隠れ家」でもあったAVホールにある先生の研究室には、NHK関連の地理に関するすべてのビデオテープが5年分開架式で所蔵しており、女性の助手も1名おり、TV放送で教材として活用できる放送をすぐに録画できるシステムがあった。「百聞は一見に如かず」と地理教育の中で言われて久しいが、そのことをまさに身をもって実践されたのが鵜飼先生であったり。

ところで昭和40年代中期は学園紛争が激しい時代で、当時の日本国際地図学会も学会開催にあたって大学が会場として使用できず、1968(昭和43)年～1986(昭和61)年の間、このAVホールが学会の会場として活用された。

私も郁文館を離れて28年目を迎えた。2022年には高等学校の地理は必修化され「地理総合」

が新設され、2～3年次では新設科目として「地理探求」が登場する。地理は暗記科目ではなく考えさせる科目として世間に認識されて久しいが、この中には、地理教育で一時代を築いた鵜飼先生の考え方と共通するものを感じている。

鵜飼先生は2012年に82歳でなくなられた。本学で教職課程の地理を担当するものの一人として、鵜飼先生から学んだことを礎に頑張っ

ていきたいと思っている。

注1)：鵜飼先生は幕末・明治時代に活躍した日本最初の商業写真家である鵜飼玉川(ぎょくせん)(1807～1887年)の末裔であることを誇りとしており、鵜飼先生ご自身、写真や視聴覚関係ではかなりのこだわりをもっていた。

文献：西木敏夫2012：紙碑 名誉会員鵜飼幸雄を偲んで。地図50-2。

● 会員の受賞 ●

- 中村 謙太さんが「第5回琉球新報教育賞」を受賞し、2019年12月4日に那覇市泉崎の琉球新報ホールで贈呈式と祝賀会が行われました。
- 渡邊 康志さんと上原 富二男さんが「Geo アクティビティコンテスト」の「データベース賞」を受賞し、2019年11月30日に日本科学未来館で表彰式が行われました。

● 会員が関わった刊行物 ●

- 沖縄市総務部総務課市史編集担当編『沖縄市史 第五巻 資料編4 戦争編 一冊子版』沖縄市役所、B5判、389頁、2019年9月7日発行、本体2,000円。崎浜靖さんがコラムで「日本本土と琉球・沖縄の「境界」—北緯30度線を基点として—」を担当して執筆しています。この市史では、第1章がアジア太平洋戦争と社会の変化、第2章が第三軍沖縄配備・米軍上陸前後、第3章が戦場になった郷土、第4章が収容所と終戦、復興、第5章が沖縄戦の「戦後」、第6章が「平和の礎」が語る市民の戦さ世、第7章が沖縄戦から基地オキナワへ、となっています。この冊子版以外に、CD版があり、冊子版で収録されなかった膨大な資料を閲覧することができ、DVD版では戦前、戦時中、戦後の収容所などの体験を語る様子や米軍が撮影した降伏調印式などの映像も収録されている。



● 会員消息 ●

- 本学会の名誉会員である西川 治さん(東京大学名誉教授)が2019年11月2日に死去されました。

活動日誌 (2019年11月～2020年6月)

▼2019/12/16(月) 2019年度第2回幹事会(沖縄国際大学13号館1階会議室、18:30～19:30) 議題: ①会務の報告、②その他

▼2019/02/13(木) 2019年度第3回幹事会(沖縄国際大学13号館1階会議室、17:00～18:00) 議題: ①会務の報告、②『沖縄地理』の電子化について、③歴史地理学会との共催について、④その他

▼2020/04/13(木) 2019年度第4回幹事会(沖縄国際大学13号館1階会議室、18:30～19:15) 議題: ①会務の報告、②2020年度総会・大会の準備、③その他

▼2020/06/8(月) 2019年度第5回幹事会(琉球大学文系総合棟602-2、18:30～19:30) 議題: ①会務の報告、②2018年度総会・大会の準備、③その他

.....
【編集後記】 本号は日本での新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、本学会の大会・総会の開催を検討したことにより、昨年より発行が遅れました。▼今回の会報では、小川会長と宮内久光さんの原稿を掲載したことにより、「一枚の図で語る地理トピック」と「FIELD NOTES」のコラムを依頼せず、掲載をしなかった。小川会長と宮内久光さん、原稿提出、有難うございました。▼次号(73号)は2020年10月発行の予定です。多くの方がコラムの原稿をお寄せ頂けると嬉しく思います。▼毎年慰霊の日に家族で平和の礎へ行くこともあり、「会員が関わった刊行物」で紹介した沖縄市史の戦争編を読み、戦争について今後世に伝える重要性を再認識しました。▼今号も小川 護会長にご高閲(校正)をお願いしました。ありがとうございました(上江洲)